

【事例紹介】

映像を活用したブレンド型英語面接訓練プログラム

－英語学習の楽しさを増し、不安を軽減する－

Blended Learning for Training and Coaching Interview Skills

文教大学経営学部 遠山 道子

TOYAMA Michiko

(Faculty of Business Administration, Bunkyo University)

キーワード：内発的動機、自己効力感、外国語教室不安、動画教材、ビデオ通話、ポジティブ心理学、海外留学

はじめに

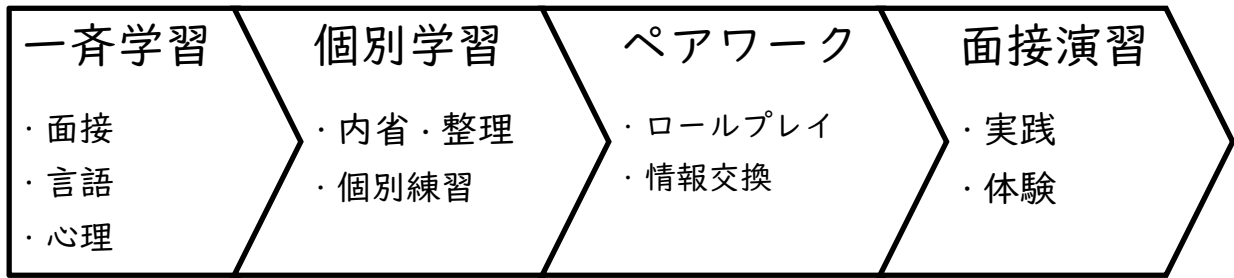
2020年、国内外でオンライン型、オンディマンド型、あるいはブレンド型の授業が急速に普及した。ブレンド型学習 (blended learning) は、異なる授業形態や学習方法を複数組み合わせさせた環境における学び、と広く定義されており (King, 2016)、典型的な例として対面授業による集団学習と e-learning による個別学習の組み合わせがある。今年度は様々な教育機関の授業で Zoom や Google Meet などのビデオ通話¹ ツールによる一斉学習と e-learning 教材による個別学習のブレンドを余儀なくされたものの、地理的に離れた者同士が顔を見て話し合えるビデオ通話技術の恩恵を受けた人は数知れない。ビデオ通話ツールには多様な活用方法があり、一人の教員が数十名の学生を相手に講義するだけでなく、二人一組でロールプレイ等の言語活動に取り組む場や、グループで課題解決型学習やディスカッションに取り組む場も創り出せる。また誰一人移動することなく、国外の学生と接続して国際的な共同プロジェクトに取り組む場を提供することもできる。

本稿では、筆者が携わる研究課題²のなかで構築したブレンド型英語面接トレーニングのプログラムを紹介する。本プログラムは、対面指導による一斉学習、動画を利用した個別学習、クラス内ペアワーク、ビデオ通話による面接演習の順で計画されており (図1)、面接と英語に関する知識・技能向上と、海外留学を妨げる心理要因の解消を目指した。以下では、このプログラムを構成する要素を順に解説し、つづいてトレーニングの効果を報告する。

¹ Web 会議とも呼ばれる。

² 日本学術振興会科学研究費基礎研究 (C) 海外留学・進出を支援する英語面接訓練法の開発 (研究代表者： 遠山道子)

図1 ブレンド型英語面接トレーニングのプログラム



対面指導による一斉学習

対面指導における教員の役割は、①面接、②言語、③心理の3分野に関わる知識の教授とスキル向上支援である。まず面接に関しては、英語面接でよく聞かれる質問をリスト化して文字と音声で提示し、意味理解を促す。英語面接の質問項目は日本国内の大学受験や就職活動で用いられるものと概ね同じであるが、“What makes you unique?”のように日本語の面接ではあまり耳にしない質問もある（遠山，2019）。こうした質問については、海外の面接官が持ちうる非日本的、あるいはグローバルな視点（例：謙虚さは美德ではない、個性を重んじる）を補足して説明し、質問の意図や答え方の例を解説することにより英語面接に関する知識を伝授し、スキル向上の土台を固める。

言語面では、英語面接練習用の動画（遠山，2019）を用いて耳慣らしを行う。この動画では英語面接の質問を中学や高校の教材ほど「はっきり・ゆっくり」にならないよう、ネイティブ同士の気軽な対話時ほど「速く」ならないよう留意して録音した。よって質問音声には自然な音声変化（連結、子音の脱落など）が含まれている。音声変化が生じている箇所は聞き取りが難解となる場合が多いため、注意喚起と解説を行う。また英語母語話者による応答例の音声を用いて聞きとりとシャドーイングの一斉練習をしてもらい、観察して気が付いた点はフィードバックし、さらにコミュニケーションにおけるイントネーションと語強勢の役割について解説を加える。

心理面に関しては、不安軽減に力を入れる。面接を受ける側は不安や焦りを覚える。外国語の使用においても同様である。外国語不安は外国語4技能の成績不振と結びついていることを示す研究は少なくない（Horwitz, 2001; Botes et al., 2020; Zhang, 2019）。そこで対面指導では折に触れて、ポジティブな感情を意識し高めることで不安や緊張は軽減できる（Dewaele et al., 2019）と教え、このマインドセットの醸成を手助けする。多くの学習者は「英語で質問されても聞き取れない」、「英語を話せるようになるか心配だ」といった漠然とした悩みを持つ傾向にある（Toyama & Yamazaki, 2019a）。本プログラムの一斉学習では、こうした考えは非合理的であり、不安の原因となることを知ってもらう。これは理感情行動療法 (rational emotive behavioral therapy) の応用である。さらにこうした非合理

的な思考を排除する方法として、positive self-talk（練習すれば上手くなる、文法や発音を間違えても伝われば良い、のように肯定的なメッセージを自分に言い聞かせる）のやり方を紹介する。これは学習方略（learning strategy）の一種、情意方略（affective strategies）の一つとして知られており、不安や緊張で頭が真っ白になると訴える学習者が気持ちをコントロールする上で役立つと考えられている（Oxford, 2017）。このように、面接、言語のみならず心理面でのサポートも行う点がこの訓練プログラムの特徴と言える。

個別学習

対面指導による一斉学習のあとは個別学習の時間を設け、学生はまず内省を通じて新旧知識を関連付ける。教員は、学生が経験談や思考や疑問を整理し、各面接質問にどのように答えるかを決め、言いたい事柄を表す適切な英語表現を選ぶ手助けを行う。学生からはよく「この答えであってますか/通じますか」といった質問が出るため、教員は基準（例：些細な発音や文法ミスは直さない。）を定めて評価し、必要な助言を行う。学習者一人一人の知識量や英語習熟度には大きな個人差があり、経験、疑問、つまづきは十人十色なので、面接の質問に対する答え方も多岐にわたる。したがって、このように教員が個々人に合わせた柔軟な対応ができる個別学習の時間は、面接応答の訓練プログラムに欠かせない。

その後ある程度準備ができた者から順に、上述の動画を再び使って練習をさせる。この動画では、カナダ出身の英語教員が一般的な北米の大学教員の風貌で面接官の役を演じている。オンライン面接という設定で、各質問の後には学習者が返答する時間を設け、この間、面接官が聞き入っている様子を演出するために、笑顔で相槌を打つよう依頼した。相槌の内容は特に設定せず、この教員に一任したところ、例えば“Uh-huh. Yes...oh, I see. O.K. Uh-huh. Very good. Thank you very much.”のようになった。この動画を初めて視聴する学生からは、「おお」という驚きの声や、「ふふ・・・」という笑い声があがる。いざ応答練習をする時になると、学生達も自然と笑顔になって話し始めたり、聞いてもらっている間に答えようと努めたりする。このように多少の愉快的な気分を個別学習に盛り込むことができれば、教材も学生にとって mood booster（気分転換の材料となるもの。代表的なものに、運動、瞑想、会話などがある）となり、不安軽減の一助となる。

クラス内ペアワーク

個別学習のあとはペアワークの時間を設け、一斉学習で得た知識と個別学習の内省と練習をふまえて、クラスメイト同士で英語面接のロールプレイに取り組んでもらう。面接演習の前にクラス内ペアワークを導入することにより、日本語を話せない面接演習への心構えをしてもらい狙いがある。各々が面接官役と受験者役の両方を演じ、質問も答えも英語でアウトプットする。このロールプレイは、

CALL (computer-assisted language learning)³システムのランダムペア機能で席の離れた者同士をペアリングして音声チャットで行う (Toyama & Yamazaki, 2019b) ことで、教室内で近くに座っている慣れのある相手との練習を回避でき、新鮮な気持ちと適度な緊張感を持って面接練習に挑んでもらえる。Zoomのbreakout room機能を用いても良い。普通教室の場合は、初回は隣の人、2回目は前後で、などのように変化をつけることで同様の効果が得られると思われる。学習を促進する学習者同士のコミュニケーションは、このペアワークで実現される。指導者は、学生が有用な情報を共有したり、疑問点などを話し合ったり、自分の返答が通じるか確認したり、他の人の答え方を参考にしよう指導する。こうして学生は知識と理解を深め、スキルを磨く。

面接演習

本プログラムの最終段階は、ビデオ通話を利用した面接演習である。海外の英語指導者と学生を一对一でつないで面接スキルのコーチングをしてもらう⁴。学生には練習してきた質問を実際に聞き、答える演習に挑戦してもらう(図2左)。この演習で学生が知識の応用とスキルの実践・向上ができるように、教員はファシリテーターとして学生それぞれの「体験学習」を支援する。教室を巡回し、通信状況やヘッドセット等の機器に問題があれば対処する。CALLシステムの利用が可能ならば、モニタ機能で学生の演習を画面と音声で観察し、必要な手助けを行う(図2右)。このようなファシリテーターの役割は、学生が集中して演習に取り組むために不可欠である。

図2 ビデオ通話による面接演習の様子(左)と教卓から面接演習をモニタする際の眺め(右)



³ 本トレーニングではチエル株式会社のCaLabo EXを利用した。

⁴ 本トレーニングでは、産経ヒューマンラーニング株式会社に講師紹介と接続を依頼した。

英語面接訓練プログラムの成果

本稿では、対面指導による一斉学習、動画を利用した個別学習、クラス内ペアワーク、ビデオ通話による面接演習をブレンドした英語面接訓練プログラムを紹介してきた。以下では、このプログラムが学習者の言語能力と心理にどのような効果をもたらすのかを紹介する。なお学会・論文で発表済みの成果および未発表のデータ分析途中経過を含む。

まず言語能力の向上について、英語面接練習用の動画を利用した効果について述べる。上述のように本動画は英語面接の質問の聞きとりと返答練習ができるようにし、海外留学を志望する大学生の支援を目的として作成している。この動画を教材としてトレーニングに導入し、トレーニング前後で学習者の英語の発話を流暢性、正確性、複雑性の3つの側面から分析し、話す能力に変化が生じるか考察した。その結果、3つ全てにおいて向上が認められた。詳細は遠山(2019)において報告している。また、英語ライティング能力に関する変化も調べた。本トレーニング実施前後で自己紹介のテキストデータを収集し分析したところ、流暢性と正確性が上昇していた。これはまだ学会⁵報告をしたのみで論文として未発表であるが、統計的有意差も確認している。

心理面への効果については、面接トレーニングを修了した学習者グループにおいて、英語の練習自体に対する「楽しさ」が高まる傾向が確認できた。トレーニング前後で、英語を練習する理由として「英語を話す時にワクワクする」や、「外国人が英語を話しているのを聞くと楽しくなる」、といった項目⁶がどの程度自分に当てはまるかを6段階（全くその通り=6から全然あてはまらない=1）で回答してもらい、調査・分析をした。その結果、面接トレーニングを受けたグループは平均値が有意に上昇したが、受けていないグループ（通常の授業のみ受けた学生群）では平均値が上昇していたものの統計的有意差が認められなかった。このように、ある活動自体に楽しさや達成感を見出している状態を内発的に動機づけられている（intrinsically motivated）と表現する（Ryan & Deci, 2000）。特定の活動に対して内発的動機づけが得られると、人は報酬や罰などの外発的な動機づけがなくとも自律的にその活動に取り組むようになる。つまりこの英語面接トレーニングを受けることで、学生は英語の練習そのものを楽しみ、ワクワクする活動と考えるようになり、例えば英語資格の取得だとか英語試験の得点といった外的要因に左右されることなく、自律的に英語を練習するように方向づけられた可能性がある。学習者に英語を聞いたり話したりする楽しさを知ってもらえたことは、好きこそもの上手なれと考えている筆者にとって何よりも嬉しいことであった。

また本プログラムでは、折に触れて学生が非合理的な考えを排除し、ポジティブな感情や考えを持つよう声掛けをした。その結果、先行研究（Dewaele et al., 2019）が示すように不安を軽減すること

⁵ HICELL (Hawaii International Conference on English Language and Literature Studies) 2020

⁶ Extrinsic Motivation Subscale of Language Learning Orientation Scale (Noels, Pelletier, & Vallerand, 2003)に含まれる Intrinsic regulation という尺度を用いた。

ができた。不安の測定においては、例えば「英語のクラスで話す時緊張したり混乱したりする」などの項目を含む外国語教室不安尺度 (Horwitz et al., 1986) を用いて、トレーニング前後の不安の変化を調査・分析した。結果として、平均値の有意な低下が認められ、本トレーニングを受けた学生達の外国語不安が和らいだことがわかった⁷。一方で通常授業のみを受けたグループについては、不安はわずかに低下したものの統計的有意差は生じなかった。不安は第二言語習得研究において最も研究されている感情であり、それはすなわち、多くの教育現場において不安軽減が課題となっているということだ。本稿で紹介した映像 (動画教材とビデオ通話) を活用したトレーニングが外国語不安にも良い影響を及ぼした点は注目に値し、今後の教育研究活動の参考になると考えている。

また英語の知識・スキルの獲得を、自己の成長と関連付けられるようになる傾向も認められた。本トレーニング前後で、英語が話せるようになりたいと思って英語を練習しているか、自己の成長につながると考え英語を練習しているか、などの項目で調査・分析したところ⁸、トレーニングを受けたグループの平均値は上昇しており、統計的有意差が生じた。一方でトレーニングを受けなかったグループにおいては平均値が上がらなかった⁹。この結果から次の2点が示唆される。1つは、通常の英語授業に含まれないビデオ通話による英語面接演習が、学習者が練習の意義を自分の成長と結びつけるきっかけとなったのではないかと、いう予測。もう一つは、英語の通常授業にも面接演習とまでいかになくとも英語の知識・スキルを実践できる場を設け、学習者の意識改革を促したほうが人材育成という観点で良いのではないかと、いう提案である。

さらに英語面接に対する自己効力感も高まることが確認できた¹⁰。自己効力感という概念を簡単に説明するならば、ある特定の課題に対する自信、と言える。ある課題に対して自己効力感が高い者は低いものに比べ、失敗や困難にぶつかっても立ち直りが早く、忍耐強く挑戦を続ける傾向にあることがわかっている¹¹。またアカデミックな自己効力感とは成績との関連性が高いことも研究により明らかにされている (詳細は Honicke & Broadben (2016) などのレビュー論文を参照)。すなわち英語の面接で上手く答える自信が付き、実際に良い評価が得られる可能性が高まったと言える。

英語学習者の心には、留学やグローバルな活動への熱意を冷ましてしまうような要因が大なり小なり潜んでいると思う。英語の使用や学びに関する非合理的な考え、そこから生じる不安、英語でやりとりする自信の欠如、英語学習に価値を見出せない状態などを放っておくと、暗い影を落とす。今回の研究課題で構築したこの英語面接トレーニングが、こうした学習者の心理要因を多少なりとも改善

⁷ 不安の結果は JALT (Japan Association for Language Teaching) 北海道 2019 で一部報告した。

⁸ Extrinsic Motivation Subscale of Language Learning Orientation Scale (Noels, Pelletier, & Vallerand, 2003) に含まれる Identified regulation という尺度を用いた。

⁹ この結果は JALT (Japan Association for Language Teaching) 北海道 2019 で一部報告した。

¹⁰ FLEAT (Foreign Language Education and Technology) 7 にて報告した。

¹¹ 自己効力感とはカナダの心理学者 Albert Bandura が提唱した概念で、多岐にわたる研究が世界中で行われている。

し、日本国外への一步を後押しできるとき、努力の結実だと心から思える。

まとめ

本稿で紹介した英語面接トレーニングは、海外留学を目指し言語・心理面における改善を必要とする学生の支援となることを目指した。前節で述べたように、このトレーニングは①言語スキルの向上、②学習心理の改善という2つの効果を確認することができたため、目的は達成できたと考えている。

参考文献

- Botes, E., Dewaele, J. -M., & Greiff, S. (2020). The Foreign Language Classroom Anxiety Scale and Academic Achievement: An Overview of the Prevailing Literature and a Meta-Analysis. *Journal for the Psychology of Language Learning*, 2(1), 26–56.
- Dewaele, J. -M., Chen, X., Padilla, A. M., & Lake, J. (2019). The flowering of positive psychology in foreign/second language teaching and acquisition research. *Frontiers in Psychology*. 10:2128. doi: 10.3389/fpsyg.2019.02128
- Honick, T., & Broadbent, J. (2016). The Relation of Academic Self-Efficacy to University Student Academic Performance: A Systematic Review. *Educational Research Review*, 17, 63-84. <http://dx.doi.org/10.1016/j.edurev.2015.11.002>.
- Horwitz, E. K. (2001). Language Anxiety and Achievement. *Annual Review of Applied Linguistics*, 21, 112–126.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern language journal*, 70(2), 125-132.
- King, A. (2016). *Blended language learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Oxford, R. (2017). Anxious language learners can change their minds: Ideas and strategies from traditional psychology and positive psychology. In Gkonou, C., Daubney, M., Dewaele, J.-M. (Eds.), *New insights into language anxiety: Theory, research and educational implications* (pp. 179-199). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clement, R., & Vallerand, R. J. (2003). Why are you learning a second language? Motivational orientations and self-determination theory. *Language learning*, 53(1), 33-64.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67.
- Toyama, M., & Yamazaki, Y. (2019a). Anxiety reduction sessions in foreign language classrooms. *The Language Learning Journal*, 1-13.

- Toyama, M., & Yamazaki, Y. (2019b). Blended Learning Sessions to Improve job Interview Skills. In *European Conference on e-Learning* (pp. 698-700). Academic Conferences International Limited.
- Zhang, X. (2019). Foreign Language Anxiety and Foreign Language Performance: A Meta-Analysis. *Modern Language Journal*, 103(4), 763–781. <https://doi.org/10.1111/modl.12590>
- 遠山道子. (2019). 英語面接における会話技能の育成に向けて. *外国語教育メディア学会関東支部研究紀要*, 3, 69.